

イシガケチョウの飼育法

作成：2005.9.05 仲西周二



全般

植樹のイヌビワ（もしくはイチジク）は切り枝の水揚げが抜群に良いので、本種の飼育は初めて飼育する人にも非常に容易である。通常であれば、幼虫は机上や棚上に置かれた切枝の瓶挿しから逃げ出すことは無い。植樹が傷んだり、蛹化の場合のみ離れ

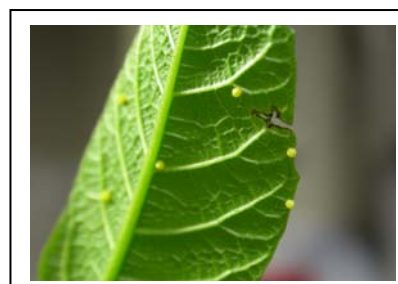
る事がある。

とは言え、僅かだが注意事項はある。高温度には強いが蒸れには弱く、又袋掛などした場合の擦れにも弱い。密閉容器内での飼育や、袋掛の袋が幼虫の体をこするような飼育は避けたほうが賢明である。

採卵

母蝶からの採卵は極めて容易である。袋掛けでも容器内採卵でも、植樹があり明るい半日陰で、出来れば風通しがあれば更に良い。唯一つの留意事項は、新芽にしか産卵しないことである。新芽の葉が少し開いていれば一番良いが、葉が無くても芽が出なかった状態でも構わない。成葉にはほとん

どといっ
てよいほ
ど産卵し
ない。



卵の管理

卵が産まれた新梢をそのまま瓶挿しして孵化を待つ。郵送などで葉が萎れたりして孵化幼虫が食べるのにふさわしくない場合は、別の新梢を切枝にして、その葉先に卵のついた葉を切り取ってピンもしくは木工ボンドで留めておく。孵化幼虫は新葉の主葉脈の先端、そこに先住者がいれば脇の支脈の

先端に特有の食痕（葉のかけらや糞を糸でつづってカーテンを垂らす）を形成してそこに座を構える。幼虫同士は共食いをすることは無いが、幼虫の密度が高すぎると羽化成虫の大きさが小さくなりがちなので、可能な限り密度は薄いほうが理想である。

幼虫の管理

幼虫に与える餌は新葉に限る。中齢以後の幼虫は、新葉でない大きな葉も食べるが、浅緑色の新しい成葉に限られる。深緑色になった硬い成葉は好まない。春先は植樹には新葉しかないので問題は無いが、夏から秋にかけては既に硬くなった成葉ばかり



新葉を食べる中齢幼虫

で新葉が無い事があり苦勞する。飼育計画があれば、予め植樹を剪定して新芽を出させておくなどの準備も心掛けたい。上図は終齢幼虫。



蛹化

おとなしい幼虫は蛹化の時も瓶挿しの切枝に下垂して蛹となることが多いが、流石にこの時ばかりは動き回り、植樹を離れて部屋の中でどこかへ消えてしまうこともまま起こる。私は幼虫が逃げ出さない程度に隙間が



開いた容器に、瓶挿しごと収容して逃亡を防いでいる。写真の容



器がその一つであるが、本体は透明な蓋付きのポリバケツで、プラスチック製の蓋の中央をくり抜いてそこにプラスチック製の水切りザルをガムテープで止めている。

羽化

蛹が出来上がれば枝ごと切って、羽化箱に

移し羽化させる。特別の扱いは何も無い。